東京・枝川町の朝鮮人簡易住宅建設計をめぐる一考察

高柳 俊男

東京都江東区の南部に、枝川町という名のまちがある。現在の正式名称は「深川区枝川町」だが、かつては「江東区枝川町」と呼ばれていった。ここは東京の在日朝鮮人の集住地域の一つとして知られている。

全国のあちこちにある在日朝鮮人の集住地域を、その形成のされ方から分類してみると、まず住環境としての条件の悪い場所に大勢で住みつくことによって、いわば自然発生的になったものがある。たとえば都市の場末、低湿地、河川敷などであり、『不良住宅地区』や『空港街』などと呼ばれた地域と重なることが多い。場合によっては行政側から見れば、公有地を不法占拠して作られたケースもある。ここには住居費をなるべく切りつけなければならないと考えている。この枝川町の場合、このいずれにも該当しない。このまちは行政である東京市が朝鮮人向けに簡易住宅を建設したことに始まるもので、全国的にみても特異なケースであると思われる。ここではそうした経緯をもって枝川町の歴史を、とくに簡易住宅建設を前後する時期を中心に考察してみたい。

筆者は『朝鮮問題を学ぶ江東区民の会』のメンバーとして、一九八六年以来この枝川町の調査にかかわってきた。そのため、『東京のコリアン・タウン枝川物語』としてまとめられている。本書は第一部をおもに在日朝鮮
二
市営簡易住宅の建設

枝川町に簡易住宅が建設されたのは、一九四〇年から四一年にかけてである。当時ここは、東京湾の最南端の埋立地であった。いま一九三七年を示す『地図1』と、一九四五年を示す『地図2』を比べてみれば一目瞭然であろう。

※方位は上が北を示す。出典などは注③参照。
......
これから二期に分けてつくられた簡易住宅の事業がスタートしたのは、『東京市公報』によれば一九四二年七月一日のことである。opacityに見られたように、この日を発表した第二期工事は、三月二日に三月二十五日に話を続けたのである。"〇四〇種工事の工業による"工事は、総合洗場A、B、C、Dの三棟の二階建てのもので、市街地の片側に一棟ずつ計六棟建っているのがわかる。それと同時に、住宅群の端にカギ型の大きな建物が一棟見えているが、これについては後述する。

史苑（第五十六巻二号）
表1 簡易住宅使用料

<p>| | | | | | |</p>
<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

東京・枝川町の朝鮮人簡易住宅建設をめぐる考察（高柳）
まだその十年後に出版された藤島宅内監修『ドキュメント朝鮮人』にも、次のような記述がある。
一九五一年の戦後の東京被災者集団地域調査において、半島出身労働者集団地区にあり、特に深川、浜川端に集されていった東京被災者の生活状況について調査した結果を基に、東京の住宅問題についての分析を行った。この調査は、被災者の生活環境、特に住宅問題を詳しくとらえ、政府の対策を求めるものであった。

調査の主な内容は、被災者の生活実態を反映した住宅の状況、特にプライバシーや衛生に関する問題が多かった。また、被災者の生活の安定を図るための都市計画の必要性が示された。

この報告は、被災者の生活実態を反映した住宅の状況、特にプライバシーや衛生に関する問題が多かった。また、被災者の生活の安定を図るための都市計画の必要性が示された。
東京・枝川町の朝鮮人簡易住宅建設をめぐる考察（高柳）

あり、ときにつきましたは「内締体」をスローガンとする皇民化政策を大々的に広げていた時期であるため、すべての住民がその線に沿って共感されていた。したがって、我々がごく自然に含められているように、逆に逆にそうであるからこそ当時の盛り付けの真実は含まれているよう、また逆にそうであるからこそ当時の盛り付けの真実を実に示していくものである。

実際この当時、「内締体」の実を挙げるためにも、朝鮮人「不良住宅」問題の速やかな解決が各地で求められていた。しかもかつてのない実績を含めた「朝鮮人住宅問題対策」を樹立し、調査員を派遣して調査を開始したのが、その対策中にはまたあったよう、費用は朝鮮総督府が全額出したという説は広く伝えられ、私たちは聞き書き活動のなかでしばしば耳にした。そうした説が出てくる根拠は、南総督の深川視察中にあったという五万円の施設改築費の問題がある。これが枝川町の簡易住宅建設費の一部に充当されたかどうかは不明だが、住宅建設は東京市の事業であるから、基本的には市の予算で賄われたと考えるのが順当であろう。しかし、さきの「ドキュメント朝鮮人」の記述にあうように、費用は朝鮮総督府が全額出したという説は広く伝えており、私たちも聞き書き活動のなかでしばしば耳にした。そうした説が出てくる根拠は、南総督の深川視察中にあったという五万円の施設改築費の問題がある。これが枝川町の簡易住宅建設費の一部に充当されたかどうかは不明だが、住宅建設は東京市の事業であるから、基本的には市の予算で賄われたと考えるのが順当であろう。しかし、さきの「ドキュメント朝鮮人」の記述にあうように、費用は朝鮮総督府が全額出したという説は広く伝えており、私たちも聞き書き活動のなかでしばしば耳にした。そうした説が出てくる根拠は、南総督の深川視察中にあったという五万円の施設改築費の問題がある。これが枝川町の簡易住宅建設費の一部に充当されたかどうかは不明だが、住宅建設は東京市の事業であるから、基本的には市の予算で賄われたと考えるのが順当であろう。しかし、さきの「ドキュメント朝鮮人」の記述にあうように、費用は朝鮮総督府が全額出したという説は広く伝えており、私たちも聞き書き活動のなかでしばしば耳にした。そうした説が出てくる根拠は、南総督の深川視察中にあったという五万円の施設改築費の問題がある。これが枝川町の簡易住宅建設費の一部に充当されたかどうかは不明だが、住宅建設は東京市の事業であるから、基本的には市の予算で賄われたと考えるのが順当であろう。しかし、さきの「ドキュメント朝鮮人」の記述にあうように、費用は朝鮮総督府が全額出したという説は広く伝えており、私たちも聞き書き活動のなかでしばしば耳にした。そうした説が出てくる根拠は、南総督の深川視察中にあったという五万円の施設改築費の問題がある。これが枝川町の簡易住宅建設費の一部に充当されたかどうかは不明だが、住宅建設は東京市の事業であるから、基本的には市の予算で賄われたと考えのが
中里晶音（なかざと きょうね）

「早春の日」

開講日：3月1日

講座：国語

講師：中里晶音

所蔵：国語部

講義内容：

早春の日は、春の始まりを告げる大切な日です。この日には、新しい一年の始まりを感じることができ、心を新たにすることを願います。本講義では、早春の日の歴史的背景、文化の意味、詩や歌の例を通じて、この日をより深く理解し、体験しようとします。

参考文献：

1. 中里晶音（2023）. 早春の日 − 意義と歴史−. 国語部出版

2. 田中光弘（2018）. 春の始まり − 早春の日を読む−. 人文部出版

3. 福田弘明（2021）. 国語の魅力 − 早春の日の魅力−. 国語部出版
東京・枝川町の朝鮮人簡易住宅建設をめぐる一考察（高柳）

こう見ていくと、朝鮮人住民に対する統制が日常生活全般にわたって浸透していたように思われるが、実際には何とかつってある」と記されている。

いくらなんでも朝鮮人だけの極度に密接した集住地域であり、そこには朝鮮人独自の生活形態が残されていた。

しかし、戦後のものであったが、前掲『在日朝鮮人の生活実態』によつてはおそらく今も残っていることになろう。人々は、

朝鮮のどぶろくであるマッコリについて、次のような興味ある記述もある。従用されて付近の大工場へたれられた朝鮮の労働者たちが、この集落にたどりよう郷土色を

みそせて群れてきた。その人たちを相手に朝鮮酒の濁酒をつ

って売る人が出てきた。すると、酒のないときでもあり、

まで聞く間に日本人労働者の間にも伝染され、この集落に

自己の支配下に置いた。そして「大衆に向かって、さも

自分が世話をしたために住宅を建ててもらい、仕事もあて

わかれているんだ」という風に思いこまされている。徐々に

会館の話に戻ろう。この枝川町のもの以外に、東京で

は朝鮮人向けの隷保館がもう一カ所、芝浦につくられる予
五 おわりに — 戦後の枝川町

枝川町は戦後、日本社会のなかでも著しく有名になった。『犯罪』や事件、民族運動や革命間争いなどが絡み合ったという。報道によると、この枝川町の戦後は、簡易住宅の問題を超えるものであった。なぜなら、ここは戦後の東京の雰囲気を描かれているからである。（『東京のコリアン・タウン』）

簡易住宅の建替えは、戦後の東京市の問題です。戦後の東京市の簡易住宅は、戦時中と戦後を問わず、多くの問題を生んでいた。しかし、戦後は、戦前の問題を拡大したようなものであった。（『東京のコリアン・タウン』）

そして、戦後の東京市の問題は、戦前の問題を拡大したようなものであった。（『東京のコリアン・タウン』）

そうした折、一九四五〜四六年の三月九日から十日にかけて東京の戦火が起こるが、住民総出の消火活動の結果、下町の大半が焼失した。然而、戦火によって焼失した枝川町だけが焼け残った。そして、続々とやって来る被災者に対して、枝川町の住民は食料や寝る場所を提供して助け合った。これは『朝日新聞』の九四五四年四月一日付の記事で、家をも失った戦友を手助けする国の心である。この記事は、戦友をよんでいたが、戦火によって焼失した枝川町だけが焼け残った。そして、続々とやって来る被災者に対して、枝川町の住民は食料や寝る場所を提供して助け合った。これは『朝日新聞』の九四五四年四月一日付の記事で、家をも失った戦友を手助けする国の心である。
東京・枝川町の朝鮮人簡易住宅建設をめぐる考察（高柳）

して時代が下るにつれて、日本人の割合も高まってきて現
在にいたっている。

ちなみに、概数にすぎないが、一九五二年の段階で朝鮮
人一四五戸（七〇〇人前後）、日本人一三七戸（六〇
〇人前後）と記録されており、戦後における日本人住民の
急激な増加を裏付けている。

簡易住宅の戦後のもう一つの大きな変化は、居住者が各々
の部屋を増築ないし改築したことである。それもその中でみられ
るような作りは「解放新聞」等の記事は、倒れかかった家
破りの窓ガラス、塗地半開きになっていた開戸。雨のせ
いか、街の光景は「しょお悲惨にみえた」と描写してい
る。実際、その街に付された簡易住宅の写真を見て、荒廃のよう
すが窺われる。おそらく、その前後の時期から、個々の住民
による増築が徐々に始まったものと思われる。アサヒ
グラフ一九五三年八月一九日号に掲載された簡易住宅の
全景写真は、建設された当初の原型をはっきりさせてい
ているが、よく見るとすでに増築が一部で始まって
いるのが確認することができる。

現在では一戸型二棟を除いて、ほとんどの家が
増築を経ているので、注意して見ないとともに集合住
宅だっただけに、また全体としても、水道が各戸に引かれるこ
とによりかつての共同洗場のあとが公園（朝日児童遊園）
になるなど、一定の変化が遂げられた。しかし現在でも土地は
東京都（管轄は港湾局）の所有で、家賃を払っていない代わりに、土地も居住者各人の所有に納まっていないという
不安定な立場に置かれており、今後も問題を残している。

次に隣保館は、日本が第二次世界大戦に敗れ、植民地朝
鮮を放棄することによって、その与えられた歴史的使命を
終えた。代わってこの建物に与えられた役割は、枝川町に
住む朝鮮人の子供たちが学ぶ民族学校の校舎として、同化
教育のもので奪われた民族の言語や自覚を取り戻すための
戦後全国に五〇〇以上つくられた民族学校の出立には、同
様な例がほかにもあっただと思われる。

枝川の民族学校は一九四六年七月の創立から現在まで、
途中に一九四九年二月から一九五五年三月までの「都立
朝鮮人学校」の時代を挟みながらも、一貫してこの場所に
建っている。校舎も一九四六年二月に鉄筋の新築校舎に建
替えられるまでは、基本的に隣保館当時のものが使われ
ていた。戦後、従来あった間の道を取り払って学校の敷地

— 72 —
感謝した。また、『京城日報』の一連の記事を提供し、なかだざきの村、資料を基にしてアドバイスをいただいた外村大氏、資料探索に際してアドバイスをいただいた東京都公文書館の水野保氏にもお礼を申し述べたい。

※付記
本稿では「朝鮮問題を学ぶ江東区民の会」のメンバーと行なった枝川町の聞き取り調査の結果が、直接関係に反映されている。中沢康夫氏をはじめとする会の皆さんに感謝したい。また、『京城日報』の一連の記事を提供していただき、外村大氏、資料を基にしてアドバイスをいただいた東京都公文書館の水野保氏にもお礼を申し述べたい。

注
①枝川町の埋立が完成し、深川区に編入されたのは、一九二九年のことである。
②江東・在日朝鮮人の歴史を記録する会編『東京のコリアン・タウン』の出版前付記事を参考にした。また、枝川町の歴史をテーマにした著者の講演記録が、現代語学塾の事務所に保存されている。
③松村町の埋立が完成し、深川区に編入されたのは、一九二九年のことである。

史苑（第十五巻三号）
東京・枝川町の朝鮮風簡易住宅建設をめぐる考察（高柳）

5. 分類番号は「三三四」、内容名は「住宅」。

6. 新谷組は現在「新谷建設」と称し、江東区東陽三丁目にある。

7. 東京市公報、第三図四号、一九四一年四月一日。

8. この建物の一階部分には、現在でも共同便所が残って裏側に使っている。ただし、本来の用途ではない。

9. 場所は友近出版された橋本一夫の『幻の東京オリビン』。

10. 『幻の東京オリビン』に、そうした経緯を詳細に追っている。

11. 鳴川の朝鮮人自治団体の「共同執筆」とある。

12. 新聞編集部の「共同執筆」としている。

13. 東京市役所第十九回オリビン東京大会東京市報専門書。

14. 東京市役所『第十七回オリビン東京大会東京市報専門書』。

15. 朝鮮人住居地における生活実態、東京都江東区枝川町の朝鮮人集団生活実態について。

16. 新聞掲載は、戦後の枝川町での生活実態、特に一九五一年四月の東京市役所半島出先労働者組織団体調査、一九五五年九月から一九五七年八月にかけて市内にある百人以上の集団生活状況を調査した。

17. 藤島内監修、日本読書新聞編『ドキュメント朝鮮人』。

18. 日本現代史の暗い影、日本読書新聞編出版、一九五五年一月。

19. 日本現代史の暗い影に掲載された藤島内、宮内、宮内協会の報告が、一九五五年一月にかけた日本読書新聞に連載された記事をまとめたもので、藤島内のルポの部分は連載最終回。一九四四年四月三日号に掲載された。

20. 『京城日報』一九三九年五月二七日付記事、『内閣消息』の掲載。
(婚禮三捧祝詞)

(善哉) 撫我手而含笑戴淸輝／霞照我令三姫・沙洲